

詩人藤川幸之助、母の介護

大町 公

はじめに

介護殺人、介護自殺、介護心中など、介護をめぐる悲惨な事件は跡を絶たない。子が介護に疲れ、老親をあやめる場合がある。また、老夫婦の一方が長年の介護のあと、他方に手をかける場合もある。これらをなんとか減らすことはできないか。特別養護老人ホームなどの施設を増やすというのも大事だろう。ホームヘルパーなどの在宅支援を充実させることも大切だろう。

子が親を、妻が夫を、あるいは夫が妻を介護する。介護と言っても、いろんな場合が考えられるが、以下では、子が老親の介護をする場合に限定して考えてみたい。そして、介護をする上での心構えというか、覚悟というか、うまくいくためのヒントのようなものを探ってみたい。藤川幸之助の詩集『マザー』を読んで、そんなことを考えた。

筆者も十年前に父を亡くし、五年前に母を亡くした。介護は、独身で、両親と同居していた姉が中心になり、実家からそう遠くない所に住む

筆者がそれを手伝うような形だった。兄弟のもうひとり、兄は実家からちよつと離れたところに住んでいた。今で言う「シングル介護」ということになるのだろうか。姉の負担が圧倒的に大きかった。

兄嫁も、妻も、介護にはほとんど関与しなかった。筆者は、もはや長男の嫁が親の介護の責任を負うという時代ではないだろうと考えた。実の姉弟でできるうちは、それでいいのではないかと思っていた。しかし、そうは言っても、そのことはまぢがいないくその後の人間関係に深い影を落としていく。

父は老人保健施設に入所して半年後、誤嚥による肺炎のため、大寒の頃、病院で亡くなった。母は子宮頸がんの放射線治療後、ほとんどのものを食べなくなり、九月初めに入院、胃瘻をしたあと、十一月下旬に亡くなった。病院側の説明は、「容態が急変されました、……」とか、「看護師が部屋に入ると、ぐったりとされてまして、……」というものだった。

中心になって世話をしていなかった筆者が言うのもなんだが、両親の場合、介護の苦勞はそれほど長期にわたるものではなかった。もう少し長引いていれば、兄弟三人に、妻たちを加え、その間に激しい葛藤や軋轢、いさかいをまちがいなく生んだことだろう。

今年になって、四月、元歌手で女優だった清水由貴子さん（四九歳）が、静岡・富士霊園にある父の墓前で、ビニール袋をかぶって硫化水素を吸い、自殺していた。傍らには、車椅子に乗った八〇代の母親がいたが、こちらは硫化水素を吸っておらず、無事だった。認知症を患い、目の前で起きた出来事もわからないらしい。

清水さんは妹とともに母親を介護していた。父を早くに亡くし、いわゆる母子家庭に育った。若い頃から母親思いだったようだ。介護との両立が難しいということで、二〇〇六年には、芸能界を引退した。今年の三月、要介護認定のために訪れた調査員にも、「何とかやれています」と語っていた。母親は昨夏転倒し、肋骨を折り、「要介護度」も最も重い五となった。自殺の原因は、新聞には、「介護疲れとみられる」とある。父の墓前であることから、彼女は自殺ではなく、母親との無理心中を考えていたのかもしれない。姉らしく、妹を介護の苦しみから解放してやりたかったとも想像できる。

なぜ子が親の介護のために死なねばならないのか？ 今ではそういう死も特にめずらしいものでなくなつた。子が親よりも先に死ぬことは、逆縁とか「先立つ不孝」という言葉があるように、親も子も何より嫌つてきた。介護をめぐって、親子の関係が、変質してしまつたの

ではないか。落合恵子に「母に歌う子守唄」という本がある。介護する親子の間は、どういう関係が望ましいか、いまだに成熟したものは、輪郭すら見えていないのではないかと思う。そう心配する理由がある。筆者は老いをテーマとした講義をしているので、学生の関心を喚起することを意図して、学期の初めに、「将来、親が寝た切りになつたらどうするか」という題で文章を綴ってもらっている。ここ何年か続けているので、その特徴を挙げてみよう。

①「この年齢まで、ずっと親の世話になってきたのだから、親が寝た切りになれば、今度は自分が家で最後まで面倒を見たい。」こういう答えが多い。七割くらいになるだろうか。なんとも優しい学生たちであるし、麗しい親子関係であると思う。しかし、現在、母親が自宅で祖父あるいは祖母（曾祖父母の場合もある）の介護をしているという学生は、こうは答えない。最後まで家で介護を続けるのは無理があるし、将来、親には施設に入ってもらいたいと答えている。②今の学生は、将来自分が結婚していることを前提として考えない。「もし結婚していれば、〜」と答える学生が多い。自分の親が寝た切りになつた時の配偶者に言及するものが極めて少ない。学生たちは、自分の親と同じほど、配偶者の親を大事には思うことができないと感じているようだ。そういうこともあって、男子学生は配偶者が果たして自分の親を大事にしてくれるかどうかに不安を持っている。女子学生は、自分の親と同居する義姉あるいは義妹に信頼を置いていない。

③親から受けた恩は、何も親を長期にわたって介護することで返さなければならぬと考える必要はなく、今度は自分の子供を大切にすることで返せるのではないか、そう考える方が自然ではないかと、筆者から提案してみるが、学生たちはもう一つびんと来ないようだ。

以上から考えてみても、清水さんのような事件が今後も起きる可能性は十二分にある。では、子が親の介護をするにあたり、過度の責任を負おうとして、結果的に、殺人、自殺や心中に追い込まれることがないようにするには、どういう点に配慮しなければならないか。

一、藤川幸之助さんのこと

筆者が藤川幸之助を、またその詩集『マザー』（二〇〇〇、ポプラ社）を知ったのはどこであったか。それは、小澤勲が『ケアってなんだろう』（二〇〇六、医学書院）で、認知症を知るための適当な本を紹介している文章であった。『マザー』は真紅と濃紺二色の帯を巻き、紺の部分に「介護の詩（うた）」、赤の部分に「母さん、／おれのこと／わかるか。」とある。鮮烈な印象を与える装丁である。認知症を患う母の介護の詩集であることが一目でわかる。

藤川は一九六二年熊本県生まれ。現在四十七歳。詩人。元小学校教諭。今は、認知症の母親に寄り添いながら、命や認知症を題材にして作品を作り続け、全国各地で、認知症への理解を深めるため講演活動

を行っている。筆者も今年二月末、北九州市小倉で氏の講演「支える側が支えられるとき―認知症の母が教えてくれたこと―」を聞くことができた。氏の講演は、母の介護と同時に自分の詩を紹介するものだったので、氏の全体像を把握することができたように思う。できればその講演を再現してみたい。

ちょうど一年前、次の二冊の本が出版されている。

『満月の夜、母を施設へ置いて』中央法規、二〇〇八

『手をつないで見上げた空は 認知症の母からの贈り物』ポプラ社、二〇〇八

前者は、『マザー』と『ライスカレードと母と海』二冊の詩集、長崎新聞に連載中の「母の詩」、それに未発表作品から選んだ詩を集め、そこに、藤川の尊敬する詩人谷川俊太郎との対談「母から詩が降ってくる」が入る。いわば藤川のアンソロジーである。後者は、詩集『マザー』（全）に、新しい詩とエッセイを加え、改題したものである。両者の出版を考えると、この時期、自分の仕事に一区切りつけたとの考えがあったのだろうと、筆者は思う。拙論は当然この二冊を中心に取り上げていくことになるだろう。

後者の事実上の「あとがき」に当たる、エッセイ「よく眠る母の毎日」の中で、藤川はこう書いている。

「この本のもとになった詩集『マザー』を出版してから七年。私にはいろんなことがありましたが、いつも母がいてくれました。母が私

の心の支えでした。認知症という病気を通して、母は常に私を育ててくれました。母を支えていたと思っていた私が、母に支えられ育てられていたのです。「支える側が支えられる」このことを、母に教えられて、私が出会う全ての人に、私に起こる全てのことには、感謝できるようにになりました。目の前のことを全て感謝で受け入れると、生きることってなんとすてきな瞬間瞬間なんだろうと、この頃深く思うのです。」

どうやらこのあたりに、氏の到達点があるらしい。「支える側が支えられる」「母を支えていたと思っていた私が、母に支えられ育てられていた」、こういう境地に至るまでの経過を見ていくことにしようと思う。

二、母の介護

(1) 母、認知症を患う

両親は熊本県人吉市で呉服店を営んでいた。母の認知症は六〇歳の時に始まった。「若年性認知症」である。若年性は進行が早い。すでに二十一年たった。氏は長崎大学で学び、卒業後、長崎県平戸市の小學校に勤務していた。二人兄弟の兄は宮崎市で勤めていた。

母が認知症を患った頃のことは、散文詩「手帳」に詳しい。家族四人で話していた時のことである。母は何度も同じ事を聞いてくる。幸之助たちはうるさくなり、母をほったらかしにして、話をし

ていた。三人は母の病気が始まっていることなど夢にも思わない。母はまだ六〇歳である。母はほかの者の話を聞かず、なんとか自分の話しをしようとする。幸之助はいらだって、「自分の話ばかりするのはやめてくれ」と言い放った。

ふと気がつくとも母がいなくなっていた。なかなか戻ってこない。幸之助がさがしに行くと、母は三面鏡の前で何かを読んでいた。手帳だった。その手帳には、父と兄と幸之助の名前が書かれていた。声を出して、何度も何度も、幸之助の名を唱え、次に父の名前、兄の名前を、何度もくり返した。そして、最後に、自分の呼び名である「お母さん」を何度も唱えて立ち上がった。

あとから思えば、その時、母は「記憶の中から消え去ろう」としている自分の連れ合いの名前や息子の名前を必死に覚え直し、自分の呼び名を忘れまいとし、また三人の話に入ろうとしていたのだ。「母は三人の所にもどってくるなり、幸之助を呼んだ。いつもは「幸ちゃん」と呼ぶのに、その時「藤川幸之助さん」と呼んだ。父と兄は驚いた。幸之助は「はい」と答えた。とっさに出た優しさである。「父と兄の不安そうな顔。私も心の中で、これは何かの間違いだと思っていた。」それから間もなく、母はアルツハイマー病と診断された。父は子どもたちに助けを求めようとはしなかった。「自分がすっかりと見てあげて、お母さんを幸せにしてあげようと思う」(母が認知症を患った頃)と宣言した。父は母との一日の「生活スケジュール」を紙に書いて、家の壁に張った。それは次のようなものだった。

「朝起きて、二人で布団をたたみ、二人で並んで歯を磨き、二人での朝食の準備と片付け。そして、父の大正琴に合わせて二人で『旅愁』という童謡を歌い、その後じゃんけん。父が母に記憶を維持するためのいろんな質問、あなたの名前は何ですか？ 今日は何月何日ですか？ といういろいろ聞いていました。その後は、昼食をすませたら、家の周りを散歩、散歩が終わったら夕食の準備。」そういう綿密なスケジュール表が壁に貼ってあり、それに合わせて、父と母は暮らしていた。

父は「アルツハイマーの薬ができれば／母に飲ませるんだと」（『領収書』）節約につとめた。おむつ一つ、弁当二つを買うのにも、領収証をもらった。ノートに明細を書き、終わりに領収書を張った。そのノートの始まりには、墨で「誠実なる生活」と書かれてあった。幸之助の父とはそういう人であった。

「旅愁」についても少し述べる。「旅愁」とは、「ふけゆく秋の夜旅の空の／わびしき思いに　ひとり悩む／恋しやふるさと　なつかし父母／夢路にたどるは　さとの家路」である。日本ではポピュラーなこの歌の原曲はアメリカ人オードウェイが作曲し、熊本県人吉市出身の犬童球溪（いんどう・きゅうけい　一八七九—一九四三）が訳詞した翻訳唱歌である。「球溪」の号は、球磨川の溪谷に生まれたことから取った。「旅愁」は、熊本県人吉市に住む夫婦には特に思い入れの強い曲だったようだ。

二人は毎日毎日飽きることなく歌った。父の死後、幸之助が「旅愁」

を、父に似せて歌うと、母は「おーおー」と、大声をあげて喜ぶ。「さつきまで、何も分からないようにポーッと、寝ていた母が、目を開いて大声をあげるのです。父の愛が、今も母の心の中には美しい結晶となって残っているのだと思います。」（母が認知症を患った頃）と言っている。父が歌ったように歌うことが大事なのだ。うっかり、上手に歌えば、母からの反応はない。講演の中でも、最も感動的な一瞬であった。

谷川との対談にも出てくるように、藤川は母の認知症初期のことは知らない。この頃はまだ盆や正月に帰るだけだった。「お父さん大変ね」と、人ごとのようだった。あるとき、三人でドライブをした。父は弁当屋の小さなテーブルを指して、「あのテーブルに座って、お母さんと毎日食事をするんよ」と言った。父は料理ができない。母が食事を作れなくなると、弁当屋に毎日通うようになった。藤川はそれ以後は月に一回両親のもとに帰るようになった。そして、母は息子の帰りを待つようになったのである。

ある日、長崎に帰るとき、母は「しつかり仕事をやりなさい。今度帰ってくるときはカレーを作っておくから」と約束をした（父の死）。幸之助にとつて、カレーは特別な料理だった。小学校に入学したときも、運動会が終わったときも、中学校に入学したときも、高校に合格したときも、教員になったときも、母はカレーを作ってくれた。「母にとつてカレーは、私への愛情そのものでした」と言う。この頃、母の病気は急速に進んだ。母は料理の作り方をすっかり忘れた。なんと

か約束を守ろうとして、父にカレーを作ってくれるよう頼んだ。帰宅した彼を待っていたのは、父が用意したレトルトのまずいカレーであった。もはや、母のカレーは存在しなくなったのである。

認知症が進む中、母は日記を書き続けた。大学ノートに書かれていた。ある時幸之助はそれを開いた。表紙には書き始めた日付と「思いのままに記す」という標題がつけられていた。変化の乏しい内容だった。毎日同じ文面で始まり、幾行かの出来事が書かれ、同じ文面で終わった。日記に幸之助が出てくると、必ず「あの子は優しい子だから大丈夫」で終わる（「母の日記」）。これは後々まで、幸之助の心に重くのしかかったに違いない。

(2) 父の死

母の病気が始まって十年後、一九九七年、父は心臓発作で倒れた。介護の無理がたたったのだ。父は心臓が弱く、バイパス手術をし、身体障害者一級の手帳を持っていた。日頃「今死ぬことはできません。今死んだら、お母さんはどうなるんだ。私が死ぬときは連れて行きたい」と言っていた（「父の死」）。

父は入院を余儀なくされた。母はまず同じ病院に、そのあと隣にある老人保健施設に入った。父は退院することなくあつげなく逝った。母は父が死んだこともわからなかった。遺体の前できよとんとしていった。

父は幸之助に「母の世話をするように」と「遺言」を書き残していた。

た。幸之助は長崎県平戸市に住んでいる。仕事や家族のことを考えると、母を自宅に連れてくることはできなかった。父の死後、母は熊本の特別養護老人ホームに入った。幸之助は毎週末、自宅から、母の特別養護に通った。この時初めて認知症介護の大変さを知った。

ドライブに連れ出すと、車の中でウンコをする。トイレでオムツを替えていると、大声を出す。ウンコのついた尻を触ろうとする。おむつを変えている頭の上によだれを垂らす。やっと替えたかと思うと、すぐにおしっこをする。「おれの母さんなんだろうー」と、おむつを床に叩きつけたこともあった。父の苦勞が実感できた。車にもどって、泣きながら、「父さん、なんでおれがこんなことしなきゃならないんだ」と叫んだこともあった（「絆の結び直し」）。父のように、母のすべてを受け止められないでいた。

藤川は自分を責めた。「こんなときでも、母のために自分自身を差し出せない」（「父の死」）。情けなくなった。だが、いつも母のことが気になった。

(3) 母を受け容れる

私が帰ろうとすると

何も分かるはずもない母が

私の手をぎゅつとつかんだ

私がホームから帰ってしまうと

私が出ていった重い扉の前に
 ぴつたりとくつついて

ずっとその扉を見つめているんだと聞いた（「萩の花びら」部分）

認知症を患う母とは、どのような存在なのか。今の母は、昔の母とどこが、どう違うのか。幸之助は、懸命に母を理解し、受け容れようとする。「捨てる」と題された詩がある。これも母をなんとか受け容れようとしたものであろう。

母は人の話を聞かなくなった

母は言葉の入ってくる場所を

念入りにふさいで

まず言葉を捨てた

そして

母は女を捨てた

母は母であることを捨てた

母は妻であることを捨てた

母はみえを捨てた

母は父を捨てた

母は過去を捨てた

母は私を捨てた

母はすべてを捨て去った

そして一つの命になった
 でも私には

母は母のままであった（「捨てる」部分）

この頃、藤川は離婚している。どういいうきさつがあったかは、藤川自身語っていない。ただ、この離婚が母の介護と関係なかったとは、考えにくい。

「こんな思いの中、私は離婚を経験しました。恥ずかしさのあまり離婚のことを誰にも話せませんでした。そのことを隠そうとする自分自身へのむなしさと、子どもたちと離れて暮らすという言葉には表せないような大きな悲しみと後悔の固まりに、私は押しつぶされそうな日々でした。その押しつぶされそうな私に、父を亡くした悲しさまでもが、容赦なく痛みのおそってきました。

それから、半ばやけくそで、毎週パンをかじりながら、車で五時間の道を母のもとへ走りまわりました。母のもとに行き、母と手をつなぎ散歩をしたり、母とドライブをしたりしました。」（父の死）

次の詩「おむつ」は、先に紹介したドライブ中の出来事を題材にしているが、それから時間がたって書いたのだろう、ここでは母を受け容れている。終りの三行にもそれが表れている。

母が車の中でウンコをした

臭いが車に充満した

おむつから染み出て

車のシートにウンコが染み込んだ

急いでトイレを探し男子トイレで

尻の始末をした

母を立てたまま

おむつを替える

狭い便所の中で

母のスカートをおろす

まだ母は恥ずかしがる

「おとなしくしとかんとだめよ」

と言つて

母のお尻をポンポンとたたいてみた

子供の頃のお返しのように

少し嬉しくなった

母のお尻についたウンコや

性器に詰まったウンコを

ティッシュで何度も拭いてやる

かぶれないように拭いてやる

母が私のウンコを拭いてくれたように

私は母で

母は私で

母の死を私のものとして見つめる

私の死を母のものとして見つめてみる

母と一緒に死を見つめてみる

狭い棺桶のような直方体の

白い便所の中で

鍵を開け母の手を引いて

便所から出る

そして

左手で母をつかまえたまま

私も便器に向かい

右の手で小便を済ませた（「おむつ」）

「半ばやけくそで、毎週パンをかじりながら、車で五時間」もかけて続けた母の介護は、意外な展開を見せる。母が幸之助を救ったのである。

「他者のために自分の時間を差し出す。自分のことばかり考えていた私には、初めての経験でした。私は、自分の精神が開かれていくのを感じました。母を遠くから通って介護することで癒されていたのは、この私かもしれません。言い換えれば、母が私に目の前に打ち込むこ

とを与えて、私を助けてくれたようにも感じます。

三年ほどこんな遠距離介護が続きました。そして、認知症の母に支えられて、私はやつとのこと、この逆境を乗り越え、私は再婚をし、また新しい生活を始めました。」(父の死)

(4) 精神を開く

「他者のために自分の時間を差し出す。自分のことばかり考えていた私には、初めての経験でした。私は、自分の精神が開かれていくのを感じました。」と言う。私は藤川のこの箇所を読んだ時、フランクル『夜と霧』の中でも、最も感動的な一節を思い出した。フランクルが「生きる意味についての問いのコペルニクスの転回」と名づけたところである。

「強制収容所」では、ユダヤ人たちは過酷な労働を強いられたにもかかわらず、まことに貧弱な食料しか与えられなかった。働けなくなつた者は、容赦なくガス室に送られた。解放される日が来るのかどうかも皆目わからない。収容者たちが「生きていることにもうなんにも期待がもてない」と絶望し、よりどころを失い、次々と崩れていく中、フランクルはこの状況をどう切り開こうとしたか。考え抜いた結論が出た。「生きる意味についての問いを百八十度方向転換すること」を提起する。「わたしたちが生きていることからなを期待するのではなく、むしろひたすら、生きることがわたしたちからなを期待しているかが問題なのだ」と言い切る。「生きていることが……期待している」と言

う表現に引つかかるのなら、「生きること」は英語で言えば *live* だから、「生」でもいいし、「いのち」「生命」「人生」など、一番しっくりくる訳語を選べばいいと、筆者は思う。

こは、もう少しやわらかく言い直せば、自分が「したいこと」ではなく「しなければならぬこと」、「することを求められていること」を優先せよということである。「しなければならぬこと」をすることにこそ「生きる意味」がある。何よりも、「することを求められていること」をやるところに価値が生じる。藤川はこの「逆境」にあつて、心の中で、「回心」にも似た大きな価値の転換があつたのだろう。筆者はそう想像している。

わたしたち自身が問いの前に立っている。生きることは、日々そして時々刻々、問いかけてくる。私たちはその問いに答えを迫られているのである。答えは、具体的な行動によつて、あるいは態度によつて出される。そこにこそ意味が生じると言える。生きるとは、生きることの問いに正しく答える義務を引き受けることである。これこそが、「生き延びる見込みなど皆無のときにわたしたちを絶望から踏みとどまらせる、唯一の考え」であるとフランクルは言った。(フランクル、二〇〇二)

絶望の淵にあつた藤川に、母は矢継ぎ早に問を発し続けた。幸之助はそれに、必死に、具体的な行動をもつて答えようとした。「母が私に目の前に打ち込むことを与えて、私を助けてくれていた」のである。幸之助は母「のために自分の時間を差し出」すことによつて、「自分

の精神が開かれていくのを感じ」た。おそらく確かな手ごたえがあったのだろう。「母を遠くから通って介護することで癒されていたのは、この私かもしれない」と言う。幸之助は救われたのである。

(5) 「距離感」

藤川は母を自分の住む平戸に連れてきた。藤川はその分、心は落ちていたが、母は環境が変わって、認知症は進行した。母はまもなく言葉が発さなくなり、歩かなくなり、車いすの生活になった。おまけに、母は食べることができなくなった。医者勧めもあって「胃瘻（いろう）」してもらった。

在宅で母の世話をする決心はつかなかった。自宅近くの特養に母をあずけた。仕事の帰り、毎日母のもとに通った。休みになれば、家に連れてきて母の世話をした。しかし、「母をホームにあずけ、家で介護できない自分自身を責めました」とある。「今、振り返ってみると、あのとき私にできる精一杯のことだったのだと思います。」（長崎に連れてくる）とも言っている。

父は生活の全てをかけて、母を世話し、介護しようとした。では、遺言で、母を託された息子も同じようにしなければならぬか。筆者はそうは思わないのである。夫婦と親子とは「距離感」は違っている。そこは誤ってはならないと思う。藤川もそれを認める。

「でも、これが、認知症の母と私の距離感なのだと思うのです。（略）もし私が無理をして母を家に連れてきて、介護をしていたら、母に冷

たくしていたかもしれません。母の世話と仕事に追われ、母に優しい声をかけることができなかつたかもしれません。もしかすると、新聞で報じられるような介護疲れで認知症の母を殺した男が、私になっていたかもしれません。」

母と、つまり介護される側との距離をどう取るかという問題である。近過ぎていけないし、遠過ぎていけない。距離は、介護する側のいわば「介護（能）力」というものにも関係してくる。そこには、経済力も入ってくるだろう。家族の人数も関係あるだろう。時間の経過の中でも、距離は微妙に変わっていく。しかし、筆者も、ぴったりとはいかないが、〈適切な距離感〉というものはあると思う。藤川もそれにもとづいて、母を特養に預けたのである。こう結論している。

「人それぞれ、自分の器に合った介護される側との距離感があるのではないかと思うのです。その距離感にあわせて、介護していけばいいと、この頃思うのです。やと肩の力が抜けて、母の介護ができるようになってきました。」

(6) 妻の死

この間、再婚してまもない妻が乳癌を患い、その治療が五年続いた。いったん癌を切除、病状は落ち着いたが、二年後皮膚に転移。その後、骨髄、骨、最後には肝臓に転移した。妻は抗がん剤は打ちたくないと言い続けた。鎮痛剤のモルヒネを打つのもいやがった。藤川の、抗がん剤を「打たなければ死んでしまうよ」との強い説得で、ついに妻は

抗がん剤を打った。髪が抜け、二人でカツラを買いに行ったこともあった。何度も言い合いをした。なんとか「二人で菌を食いしはって、乗り越えようとし」た（「妻の死」）。しかし、そのかいもなく、妻は亡くなったのである。

妻の「五年間」には、母の長年の認知症の闘病のすべてがあった。後悔はないが、ただ一つ、自分の判断でよかったのかどうかと、今も考える時がある。抗がん剤のことである。妻が打ちたくないと言いつつ抗がん剤治療を受けさせ、つらい思いをさせ、結局はその一年後に亡くなった。

抗がん剤治療を受けさせてよかったのか。「ただ私は、死という点を先延ばしにしようとしただけではなかったのか？ そのために生きるということがおろそかになったように感じるので。」と言う。妻の死を経験して、幸之助の死に対する考え方も大きく変わったのである。人間である限り、母もまた当然「死を内包し」ている。果たして、「胃瘻」をしてよかったのかどうか。

三、支える側が支えられる

母は寝たきりになった。心臓が悪くなって入院して以来、よく眠るようになった。アルツハイマーの末期の症状のようにも感じる。藤川が行っても、たいてい眠ったままである。藤川は側にすわっているだけだ。

今、藤川は毎日、二時間から四時間母と一緒に過ごす。「支える側が支えられる」というのはどういうことなのだろう。

「手の温かさ」という詩がある。これを手がかりにしよう。

母の手をにぎった

母の手は冷たかった

「あなたの手は温かいわね」

と母は言わなかったが

私の温かさは

自分が冷たくなりながら

自分を分け与えながら

自分は冷たくなりながら

母の冷たさを温めていく

つないだままの手

いつの間にか

母の手も

ほくの手も

同じ温かさに…

そして

どんどん温かくなっていく

(略)

二人の手はもつともつと

温かくなつていく(「手の温かさ」部分)

母の手は冷たい。私は温めようとして、その冷たい手を握る。私の手は冷たくなる。冷たくなりながらも、母の手を温めていく。いつか二人の手は同じ温かさになる。そこで終わらない。同じ温かさになった二つの手が、不思議にも、「どんどん」「もつともつと」温かくなつていくのである。母の冷たい手のおかげで、私の温かい手はもつと温かくなる。

もう一つ手がかりを探そう。「満月の夜、母を施設へ置いて」のあとがきに、「母が認知症にならなかつたら」というエッセイがある。

「母が認知症という病気になるなかつたら、こんなに母と手をつなぐこともなかつたでしょうし、母のことを思いやることもなかつたと思います。もちろん、母の詩を書くこともなかつただろうと思います。母の世話をし、母の痛みを感じ、母がつらくないようにと一日一日暮らしていくうちに、「人が人のために生きることを母に教えられました。母は、認知症という病気を通して、私を育て、私と親子の絆を結び直してくれたのです。」

認知症の母の存在は、藤川の心の中に、それまで経験してこなかったさまざまな思いを引き起こした。藤川の心を深く掘り起こし、耕し、種を植え付けてきたのである。藤川も自分の心の中から、このような

感情や考えが溢れ出てくるなど、予想もしていなかつたらう。「母は、認知症という病気を通して、私を育て、私と親子の絆を結び直してくれた」のである。「母を支えていたと思っていた私が、母に支えられていた」。

幸之助は認知症の母を「バス停のイス」に喩える。子どもの頃、家の近くにあった「バス停のイス」である。筆者が聴いた講演でも、この詩を最後に朗読した。

バス停にほつたらかしの
雨ざらしのあの木のイス

今にもバラバラに
ほどけてしまいそうな

あのイス

バスを待つ人を座らせ

歩き疲れた老人を憩わせ

時には邪魔者扱いされ

けつとばされ

毎日のように

学校帰りの子どもを楽しませる

支える

支える

崩れていく自分を

必死に支えながらも

人を支え続け

「それが私なんだから」とつぶやく

そのイスに座り

そのつぶやきが聞こえた日は

どれだけ人を愛したかを

一日の終わり静かに考える

木のイスの余韻を

尻のあたりに少しばかり感じながら

〈愛〉の形について考える

藤川の到達した地平はここにあるようだ。藤川の心の中では、このイスが認知症を患う母の存在と合致する。崩れていく自分を必死に支えながらも、人を支え続けるイスである。そのイスに支えられて、イスを尻のあたりに感じながら、反省し、〈愛〉の形について考えるのである。母は「一つの命になった」が、「母のままであった」。幸之助には、母は今なお一つの姿を持っている。

おわりに

三好達治が「海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がある。／そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある」（『郷愁』）と歌ったように、古来、多くの人は母を海に喩えてきた。藤川もまた母を海に喩える。

「時に静かにベッドに横たわる母を見ると、母を海のように思う時があります。海は言葉をもっていません。しかし、その広さとその輝きとその青さで、私に多くのことを語ってくれます。母もまた言葉を失いましたが、凧いだ海のようなヒトミで静かに私を見つめ、言葉では伝わらないことをこの私に教えてくれます。」（「あどがき」『ライスカレーと母と海』）

「凧いだ海のようなヒトミ」を通して、「言葉では伝わらないことをこの私に教えてくれ」るのは、『満月の夜、母を施設へ置いて』の「あどがき」では、「声を発さない、言葉を持たない母の心の底深くにある静けさ」と呼んでいるものである。

藤川はホスピス・ボランティアの友人からある話を聞いた。末期癌のため余命一週間の人は、「何かしてほしいことは？」と聞かれ、「何もしてもらわなくてもいいです。ただ、家族の気配を感じたい。何もしゃべらなくても、寝ても、本を読んでいてもいい、ただ側にいてくれるだけでいい」（『よく眠る母の毎日』）と言った。ホスピスに関連した話ではよく出てくる。今日では常識に入ると言ってもいいかもしれ

れない。この話に強い関心を持った。意識も薄れ、話をするのもない、死に行く患者も、そばに誰かいてほしい。そう感じるものが心の中にある。

「母は、きつと私のことを分かっていると思うようになりました。母はきつと私の気配を感じていると思うのです」と書いています。「声を発さない、言葉を持たない母の心の底深くにある静けさ」が感じ取るといふことか。これはもう「存在の神秘」とでも言うべき領域である。

母は「特養」に入っていたが、たびたび肺炎を起こすので、病院に移った。「今では母の病状も含め、母の死を私は受け入れて、母の幸せを考えます。母が今を幸せに生きるために、今私に何ができるか、考えられるようになりました。」（「妻の死」と言う）。

二十世紀に生まれ、戦後、急速に平均寿命が延び、長期にわたる親の介護という歴史上始まって以来の事態に直面し、今、多くの家庭は呻き喘いでいる。今後も、長期にわたって、試行錯誤が繰り返されるだろう。悲惨な出来事も後を絶たないだろう。人間は、そういう苦難を経てはじめて、学び取るものでしかないのだろうと思う。

藤川の場合、母は六〇歳で「若年性認知症」を患ったので、それだけ長い時間試行錯誤を重ねてきた。詩、エッセイ、講演という形で、経験のすべてを紹介しようとしてくれている。まことにありがたい振る舞いと感謝しなければならぬ。そういう人が増えていけば、試行錯誤の時間も、少しは縮まるだろう。では、藤川幸之助から何を受け

取るのか。

「受け容れる」とか、「精神を開く」とか、「距離感」といったキーワードが思い浮かぶが、マニュアルのように、箇条書きにしてみるようなものではないだろう。それぞれの状況の中で、「生」から繰り出される問いに対し、具体的な答えを探し出さねばならない。だが、親の介護のために死ぬような選択だけはあつてはならない。まず、自分の「人生」を一番大事に考えて、その上で、親の介護を考えねばならないと筆者は思う。

注

- (1) ネット上に、「地裁が泣いた」という表現で有名な二〇〇六年「京都・認知症母殺人事件」の裁判記事がある（たとえば、「毎日新聞」二〇〇六年四月二〇日）。認知症の母（八六歳）の介護で生活苦に陥り、母と息子（五四歳）とが心中しようとする。最後に、母は息子の名を呼んで、そのあと「一緒やで」と言う場面が出てくる。認知症の母に言うのは酷かもしれないが、ここに来た時、筆者はとてつもないやな気がした。
- (2) フランクフルト、二〇〇二、二一九—二一三〇頁
- (3) フランス語で、母は*la mère*、海は*la mer*。発音は同じ。

付記

本稿は平成二〇年度奈良大学研究助成「若い、特に認知症を生きることの意味」によるものである。

参考文献

- 藤川幸之助、二〇〇〇、「マザー」ポプラ社
藤川幸之助、二〇〇四、「ライスカレーと母と海」ポプラ社
藤川幸之助、二〇〇八、「満月の夜、母を施設へ置いて」中央法規
藤川幸之助、二〇〇八、「手をつないで見上げた空は」ポプラ社
フランクフル、二〇〇二、「夜と霧」（池田香代子訳）みすず書房
小澤勲、二〇〇六、「ケアってなんだろう」医学書院

**Konosuke FUJIKAWA, le poète,
soigne de sa mère qui est malade de démence sénile.**

Isao OMACHI